哲學研究　第三百十三號　第二十七卷　第四冊

都市國家の成立

山内得立

一

都市國家とはいふまでもなく都市にして國家なるものを、都市が卽ち國家であり、國家の概念が都市を中軸として構成せられ、それを措いて外には求め得られぬものをいふのである。ギリシアに於てそれはポリス（πόλις）と名づけられた。そしてそれはギリシアの國家をして他の諸國家から、または近代の國家形態から區別せしむる所以のものをなし、ギリシアの文化も思想もこれを土臺とすることなしには理解し得られないところのものを形づくつてゐるのである。ローマではそれは urbs とよばれた、がしかしそれはこの意味の人間の協同體をよりもかくの如き協同の行はれる場所を、從つて文字通りに都市そのものを意味してゐたやうである。ポリスに近い意味をもつたものはむしろ civitas であるが、さうしてローマの都市もその起源に於てはギリシアのそれと類似したものであるが、ローマが國家としてその特色を發揮したのは後に明かにせらるゝであらう如く、ギリシアのそれとは著しく異つたものに於てで

あつた。都市國家の性格を理解するために我々は先づそれがギリシアに於て如何に成立し、そこに於て何が意味せられたかを研究しなければならぬ。

都市の成立について先づ第一に考へられるのは所謂自然的なる發生である。そこには個々の人間があり、家族があり、それらが集つて村落（κώμη）をなし都市をつくるのである。ツキュディデスもその歴史の初めに、それが恐らくギリシアの原始時代の生活であつたであらうところのものを描いてゐる。「ヘラスとよばれる國は古き時代には規律正しく住はれなかつた。人々は移動的であり人口が過剰になれば彼等は容易に家を見すてた、そこには商業はなく海陸によつて互に交通することも出來なかつた。或る部族は土地を耕したが、たゞそれは生活の維持に足るだけのものにすぎなかつた、彼等は富を蓄積することもなく土地に農耕をもしなかつた、なぜなら城壁をもたぬ彼等は常に侵略者の危險にさらされてゐたからである。富める地方――例へばテッサリアとか、ボエオティアとかアルカディアを除くペロポネソスの大部分は絶えず住民を變えた、土地が肥沃であることは個人の力を増し、それが逆に種々なる爭ひの原因となりまた外部からの侵略にさらされてゐたからである。アッティカの土地は瘠せて貧しかつたから却つてこれらの害惡から免れ、長くもとの住民を引きとゞめることができた、さうして後には移住民によつて人口が増加した。蓋し戰爭とか革命とかによつて他國を追はれた人々はアテナイに避難所を求めたからでもあらう」（Thucydides I. 2）。これらはトロイ戰爭以前の古き時代の生活であるが、ツキュディデス自らの時代（紀元前四六〇――四〇〇）に於ても例へばアエトリアに於て見出される生活でもあつた。アテナイの將軍デモステネスがアエトリアを攻略しようと企てたのも、それがかくの如く城砦なく統一なく依然として部落的生活をなしてゐた（κατὰ κώμας ἀτείχιστος）

ためであつたと傳へられる。ペロポスネス半島に於てはアルカディア人は、エパミノンダスによつてスパルタに對する政策上彼等の間に一つの都市(Megalopolis)が建設せられるまでは殆んどかくの如き部落生活に甘じてゐた。スパルタそれ自らさへそれが海岸から遠くはなれた位置にあつたために都市としての發達は甚しく遲れたといはれる。ローマにはかくの如き自然的生活をあらはすに vicus と pagus といふ二つの語があつた。さうして我々はこれらの語が何を意味し如何なる區別をもつてゐたかを明かにしないのであるがそれらが共に civitas よりも小なる村落をまたはそれに先立つ協同體を意味してゐたことだけは明かである。pagus といふ語は早く忘られたがカエサルは之をガリアの civitates の小區として尙用ゐてゐたと傳へられてゐる。vicus といふ語は長く後代まで使用せられ、fora, や conciliabula といふ語と共に小村落をあらはすに用ゐられてゐるのを見てもこのやうな自然的なる協同體が歷史的時代に於ても尙存續してゐたことは明かであらう。

さてかくの如き自然的生活の原理的なるものが何であつたかを見ると、それは多くの人々によつても論ぜられるやうに第一に血緣であり第二に土地でありさらに運命といはるべき或ものであつた。人々は一定の土地に住み同し血によつて家族を形作り運命によつて協同生活をなすべく定められてゐる。我々がこの土地に生れ此の家族によつて育てられ、この國の民として生きることは我々の意志に拘らず定められたる運命である。さうしてこのことは既に我々の生れる前に土地があり家族があり國の有つたことを意味する。個人があつて家族があるのではなく家族に於て個人が生れるのである。家族があつて氏族があるのではなく氏族に於て家族が統一せられるのである。氏族が集つて部族をなすのではなく部族に於て氏族が區分せられるのである。部族が統一して民族が作られるのではなく、民族に於て部

族が成立し得るのである。さうして凡てこれらの消息を語るものが運命であるに外ならなかつた。

しかし自然的生活はアリストテレスが記するやうに（Pol. I. 2. 1252 b）尙次の如くであつたであらう。「家族とは人間の日常の要求を充すために自然によつて建てられた團結である、そしてそのメンバーはカロンダヌによつて「戸棚の仲間」と名づけられ、クレタのエピメニデスによつて「食卓の伴侶」とよばれたところのものである。しかし多くの家族が集り、この團體が單なる日常の必要品以上の或ものを要求するに到つたときそこに初めて村落（κώμη）が生じる。村落の最も自然的な形態は同じ乳を吸つた（ὁμογάλακτες）子供等や孫達からなるところの家族のコロニーである」。のみならず彼等は同じ屋根の下にすみ、同じ煙を吸ひ（ὁμοκάπνοι）同一の釜の飯を食ふ人々（ὁμοτίμνοι）である。彼等は凡て同胞（καδίτνηγοι）であつた。さうしてその數はかなりに多き大家族に及び、ホメーロスの傳ふるところによれば五十人の兄弟と十二人の姉妹とがそれぞれ配遇者と共にプリアムの家に同居してゐたといふ。（Il. VI. 245, XXIV. 495）。土地については彼等が未だ遊牧の民であつた限りポリスをもたぬことは勿論であるが一定の場所に定住するに到つてポリスに住み、アスツユ（ἄστυ）に於て暮すやうになつた。アスツユは一般人民の住む下町であるがポリスはアクロポリスとして多くは上層の人々によつて住まはれる高地を意味した。しかしポリスとアスツユとの區別は既にホメロスに於ても殊にオデュッセイアに於て見失はれてゐる。農業や商業の發達につれてアスツユの範圍が擴大されるとともに、その重要性はポリスのそれを凌駕するに到つた。ギリシアに於て初代の帝王の墓が山上にあるに反し二代以下の王墓が外廓の低地に見出されることなどもこの一つの證據となるであらう。後代に到つてはポリスとアスツユとは全く同意義に用ゐられアクロポリスは特殊なる地域例へば神の宮居として特に截別せられ

たる場所を意味するやうになつたのである。

以上はギリシアに於ける都市の自然的發生でありそれがこの立場から見らるゝ限り極めて自然的であるが、同時にしかしそれがさうである點に於て特にギリシアに限られたものでなく、何れの國に於ても見出さるゝところの原始的形態であるといはねばならぬであらう。殊にそれを都市國家として成立せしむるところのものは何であるか、ギリシアの國家形態として他に見出され難き特色をそれに與へるものは果して何であるかが問はれねばならぬ。さうしてこの問題はただ都市の自然的なる發生を見ることによつては答へ得られないものであらう。家族が氏族に發展し氏族が種族にまで擴大してもそれによつて必ずしも都市國家が可能であるのではなく、都市が單なる都市としてゞなく、都市國家として成立するのは別種の原理によつてゞあるといはねばならぬ。自然的なる協同體であるところの κοινή はたゞに都市の前階段であるのみでなく、都市の成立の後にも尙存在し得たことは既に我々の知るところである。部落の自然的發生はいくらそれを擴大しても都市國家の概念には達し得ぬであらう。我々はここにプラトンによつて區別せられアリストテレスによつて唱道せられた、人間の生きることと善く生きることの原理的なる區別を明確に意識しなければならぬ。都市國家は人間の單にそれに於て生きるものでなく、それによつてよく生きんが爲に構造せられたるものでなければならぬ。ポリスとはたゞウルブスではなくそれに於てまたはそれによつて人間の統一的なる生活が完成せられ得るものでなければならぬ。それはたゞ個人の集合ではなく、より多くの個人によつてより多く可能なるものではなく、却つて個人に先立つ全體的なるものによつてのみ可能なのである。國家とは本質上家族や個人に先立つものであるといふアリストテレスの有名な語 (Pol. 1253 a) もこの意味に於て生かさるべきであるであらう。個

人があつて、または個人が集まることによつて國家が生ずるのではなく、國家によつて個人が集められ、そこに特殊なる集團形態が創造せられるのである。ポリスはたゞ人間の集合ではなく、同時に國家の理念を表現したものでなければならない。都市が國家としてあるのはそれがただ人間の集合としてゞはなく、國家がそれ自らの理由をそこに發揮することによつてゞあるといはれねばならぬ。たゞこの原理がギリシアに於て如何にあらはれそれが何であつたかが我々の問題であるべきである。フステル、ド、クーランジはその名著「古代都市」に於て都市が人間と家とを增大することによつて漸次的に成立するものでなく、却つて一時に、或は一日の中にさへ成立するものであることを論じさうしてその原理を宗教に求めようとした（Fustel de Coulanges: La cité antique. chap. IV.）。部落と都市との區別がたゞ數量にあるに非ずして原理的なるものにあるべきことが彼によつて鋭く認められたのである。たゞこの原理的なるものが宗教のみに見出され得るか否かは問題であり、多くの人々は彼が都市の起源を專ら宗教に求めたことを批難するのであるが、我々はむしろこの點に彼れの特異なる把捉の仕方を見なければならぬと思ふ。宗教は彼にとつて人間の協同體を構造する一つの要素であるよりもむしろこれを成立せしむべき原理的なる事實であつた。都市はそれによつてのみ單に人間の集合體としてゞなく、一つの國家として成立し得ると彼によつて考へられた。彼にとつて宗教はたゞ生きることのみではなく、よく生くべきことの原理であつたのである。フアウラーは都市の生成がたゞ宗教のみによつてゞはなく、むしろ宗教はたゞその第四の要素としてその前に他の種々なる要素を——血や土や力などの要素を數ふべきことを主張するが（W. Fowler: The City-State 30-33）、この意味の宗教はクーランジのそれとは全く異つたものであらう。都市の自然的發生の要素としては勿論之らを數へることはより完いが都市を國家として成

立せしむる原理はファウラーによつては却つて明かにせられてゐないといはねばならぬ。またグロッツはクーランジの研究が都市の全能性と個人の自由性との絶對的なるアンチノミーから把握してゐることを批難し、それは十九世紀の自由主義を支配した原理を古代ギリシアに適用するアナクロニズムにすぎぬことを論難してゐるが（Glotz: La cité grecque. p. 5）、しかし我々から見れば却つてこの點にクーランジの單なる實證主義的社會學者でないところの特異なる研究の意義を認めねばならぬのではないかと思ふ。

二

人間を以上の如き自然的狀態からして都市生活にまで齎すものは何であるか。それは αὐτάρκειαν であるといはれる。しかし synoikia とは何であらうか。語の意味からいへばそれはたゞ共に住むことであり人間が孤獨でなく集つて住むことであり狹義には夫婦の同棲を意味してゐる。しかしそれはギリシアの文化史上一つの特殊な意味を擔ふ語であつた。プラトンはポリティア（三六九、C）に於て次の如く云つてゐる。「我々は多くの缺乏をもち多くの人々はそれを充すべく互に要求せられるのであるから、或人を或目的に他の人を他の目的のために援助せしめる。かくの如く互に援け合ふ人々が一つの synoikia に於てすむときに我々はそれを國家とよぶ」。シュンオイキアはそれ故にたゞ人々が同居することではないそれによつて單に人間の集團を作ることは村落的生活に於ても可能であつたであらう。自然的生活から都市また國家生活にまで飛躍せしむるものはたゞ共に住むことにではなく、共に住むことによつて或ものを成しとげるところにあるといはねばならない。卽ち共にすむことはたゞ生きるのではなく善く生きること

を目的とする、さうして人間にとつてよく生きることは共に住むことによつて可能であるばかりでなく、たゞ生きることさへもそれを措いて外には可能ではなかつた。人間は孤獨であることが出來ない。人間が生きるのは共に生きることである。人間は既にその存在の故にシユンオイキアを求める。人間がその行動のために之を求めざるを得ぬことは勿論であるであらう。

シユンオイキアは以上の意味に於て一般に人間の社會的存在の原理であるのみでなく、それは特にギリシアに於ける都市成立の原理であつた。それは synoikia であつて單なる oekumene ではなかつた。これらは共に人間が孤獨を脱して共同的なる生活に入ることを意味するが、例へばケルストによつて峻別せられたやうに oekumene は特にギリシア末期からローマをへて中世紀に於てあらはれたコスモポリス的な協同體を意味する (J. Kaerst: Die antike Idee der Oekumene.)。しかるにギリシアの國家はポリスであつてコスモポリスではなかつた。これらの區別については後に詳論するつもりであるが、茲にはたゞシユンオイキアがポリス成立の原理であり、從つてそれが特にギリシア的なるものに限つて用ゐられてゐることを注意して置きたいと思ふ。

synoikia はまたかつてテセウスによつてアッテイカの諸市が一つに集められ、アテナイといふ一都市が成立せしめられた記念として祝はれる祭典を意味してゐる。有名なるツキユディデスの記載によればアテナイの建國は次の如くであつた(II. 15)。「ケクロプスや初代の諸王の時代からテセウスの支配時代に到るまでアテナイは多くの地方自治體に分れ、それらはそれぞれに政廳と長官とをもつてゐた。非常な重大事の場合を除くの外、彼等は王の下に會合することなく、各々自己の政務に携はり又互に助け合つてゐた。彼等の或ものは時として王と共に戰に出ることもあ

つた、例へばエレウシスの人々がエウモルピスの下でエレヒテウス人と戰つたやうに。しかしテセウスが王位に卽くや力强く智ある王であつたからして國政を種々に改革したが就中諸地方の自治體を解消してアテナイの住民全體を一つに統一し一つの國會と市廳とを打ち立てた。彼等は依然としてそれぞれの國土に住居してゐたがテセウスはアテナイを首府とし彼等をその市民として登錄した。かくして一つの都市が興りそれはテセウスによつて後代に傳へられたのである。さうしてアテナイ人は彼の時代から今日までアテナの神にかけてこの sunoikia 卽ち自治體の統一を國家的に祝祭してゐる」。この記事はよくアテナイといふ代表的都市の成立を物語つてゐると思ふ。卽ちアテナイの成立以前にもアッティカには多くの自治團體があつた。マラトンの Tetrapolis や Oenoe や Tricorythus や Probalinthus などが卽ちそれらである。これらは或意味に於て互に協同し危機に際しては互に助けあひ或は信仰を同くしてゐたのであるが、しかしそれらが眞に統一して一つの都市をなすに到つたのはテセウスの時代に於てゞあつた。しかもそれが漸次的にではなく、或る機會に一擧に實現せられたことはプルタルクスのテセウス傳(二四、三二、)に於ても見られる如くである。テセウスがクレタ島に於ける偉業を完成してアッティカに歸還し父王の沒後をうけて王位につくや、直ちにかねての素破らしい鴻圖を實現せんと試みた、彼はアッティカ全土の住民をば悉く一邑にあつめて一都市の民としようとした。このときまでアッティカの住民は國內に分散して生活し、共同の利害のためにも凡てが集合するといふことは仲々なかつた。否彼等の間には反目、爭鬪すらも屢〻起る始末であつたのである。これをテセウスは、都邑から都邑へ、種族から種族へと巡歷遊說して發和した。貧賤のものは喜んで彼の忠言を聽いた。門地高く勢望大なる者に向つては、獨裁なく專權なき共和國と、人民を主とする政治とを約し、テセウスはたゞ戰時に於ける

國軍の總司令官たり平時に於ける法權の擁護者たる地位を持つのみで自餘の萬機は悉く平等に彼等に分つべしと誓つたのである。テセウスはかく說きかく勸めて、彼等の一部をその提案に左袒せしむることが出來たし、然らざるものも彼の旭日昇天の勢望を惧れ、或は彼の勇猛果斷を豫ねて聞き及んでゐたので、武力によつて屈服せしめられるよりは寧ろ彼の辨辭に從ふに如かずとなしてこれに贊同した。そこでテセウスは各地にあつた個々の政廳議堂を、または官衙を廢棄し、アテナイの山の手に當る場所に一つの共同なる政廳と議堂とを造營し全國にアテナイの名を與へ、全國共通の祭典と、獻儀とを制定した。この祭典はパンアテナイアの祭とよばれるのである。テセウスはまた別にメテシアといはれる祭典を興した。それはこの synoikia を祝ふ祭典であつて、今でもヘカトンビーオンの月の十六日に執行されてゐる」。――我々はこれらの記載によつてアテナイの都市が各地に散在せる都邑の擴大によつて自然發生的に生じたものではなく、テセウスといふ英雄の意志によつていはゞ一擧に創作せられたものであることを知るのである。プルタルクスによればアッティカの各地に散在せる諸邑が卽時にアテナイの都市に併合せしめられたやうであるが史實としては果してさうであつたか否かは疑はしい、むしろケクロプスの岩を中心とするアテナイの都市に來住したものは貴族的生活を喜ぶ比較的上流の住民であるにすぎなかつたであらう、普通の農民は依然として各地に散在し傳來の土地を耕し昔ながらの信仰を保持しながら、しかもアテナイの市民として登錄せられた者が多かつたであらう。プルタルクスも全國にアテナイといふ名を與へたと言つてゐるのを見てもアテナイとは一つの都市の名であるよりもむしろこの都市を中心とする國家の名であつた。ポリスとはこの如く單なる都市をでなくこれを中心とする國家的協同體を意味するものである。さうして我々のこゝに繰返して注意すべきことは、ポリスの成立が自然的なる部落

の增大によつてではなく、また住民の總意によつてでもなく、却つて强大なる或る個人の意志によつて――それが果して傳說的なるテセウスであつたか否かは別問題として――構想せられ實現せられたといふことでなければならない。

尤もギリシアに於ける諸都市が凡て例外なくこの如き手續きによつて成立したと考ふことは早計であるであらう。そこには言ふまでもなく種々なる異つた形式があり或は地方によつて或は住民の氣質に從つて、或はその場合の情勢によつて、種々異り得たであらう。ストラボによればエリス（Elis）の市はペルシア戰爭後になつて初めて synoikismos が興つたといふことであるが、他の諸都市例へばアルカディアのテゲアやマンティネアに於ては地勢の關係上――それらは小山に圍まれ、南北に延びた細長く狹い平野の兩端に位してゐた――早くからシユンオイキスモスが行はれたと傳へられてゐる。アルゴスも兩方にテイリンスとミケイネとをもつて南北に延びた平野の中にあつて（アルカディアに比して廣域であるが）同樣なる地勢に於てあり、ポリスの成立も恐らくは同樣なる手續きをもつたものと思はれる。此等に於てはポリスの成立と共に住民の移住がやがて行はれた二三の例であるが、しかしギリシアは地勢上多くの山と谷とによつて隔てられ、複雜なる海岸線によつて區分せられてゐるところからして簡單なる移住には多くの不便があつた。この點にギリシアの都市がローマの建國の如く容易に集中的になり得なかつた一つの理由があつたであらう。またギリシア人は、ローマの人々が實際的であり共同生活の利益を認識することに於て敏であつたに反し、むしろそれぞれの地方に安住し樣々なる個性的區別を失はぬ人民であつたといはれてゐる。これもギリシアに於て容易にシユンオイキスモスが行はれ得なかつた理由の一つであつたであらう。ギリシアに於ける多くの都市はアテナイ

の成立に於てその代表的なるものを見た如く、其の統一の過程からいへばむしろ徐々であり容易ではなかつた、假令それが一つの名によつて呼ばれた都市であつても住民の多くは地方に散在し依然としてそれぞれの部落をなし異りたる信仰に生きてゐたであらうことを通例とする。このことは反面からいへばギリシアの都市が部落の自然的なる擴大によつて、または住民の自然的なる融合によつて生じたものであるよりもむしろより多く強力なる或る個人の主體性によつて構造せられたものであることを物語つてゐるといはねばならない。それはさらに時としては或個人の意識的なる目的によつて構造――むしろ揑造せられたといはるべき場合すら見出されるのである。例へばメガロポリスはエパミノンダスがスパルタを威嚇するために紀元前三七〇年頃建設せられた都市であつたことは有名である。それは自然的なる統合によつてではなく人爲的なる、むしろ政策的なる目的をもつて構造せられたものであることは明かである。またパウサニアスの記載によればメッセーネの都市が構築せられたのは次の如き事情によつてであつた。前七世紀頃からメッセニア人は故國を追はれてギリシアの處々に放浪せざるを得なかつたが、テイバイ人はスパルタの側翼に一つの敵國を置かんがために、メッセニア人をペロポネソスにかへしてイトメの山腹に一つの都市を建設せしめんとした。しかしこれを彼等に說得して離散したメッセニア人を糾合することは至難であつた。なぜなら彼等は故國を失つてはゐたけれど、古き慣習と信仰とをもちつゞけさうしてそれはテイバイ人のとは全く異つたものであつたからしてゞある。そこでエパミノンダスは一策を案じてかつてメッセニア人に背をむけた神々が今や彼等に好意を示しつあることを以てして臆病なる彼等をメッセーネに引戻すことに成功したと傳へられる。アルカディーアのメガロポリスと、メッセーネ市の建設はエパミノンダスの對スパルタ牽制政策によつたものであることは明かであるが、これに

よつて見てもギリシアの或都市が時として個人の意志によつて或目的のために構造せられたものであることが實證せられるのである。歴史は決して事物の自然的發生または生長ではあり得ない。それはむしろ強力たる個人の、または多くの人々の構造するところである。歴史に於ける主體性が最も活潑にあらはれた例として常に引用せられるのはエパミノンダスの事蹟についてであつた。マンティネアの戰ひに於てテイバイ人は壓倒的な勝利を得ながらやがてスパルタと和を媾じなければならなかつたのは何故であつたか。それはエパミノンダスの戰死のためであり、ボエオチアの統一と勢力とが如何に一個の天才の生存に依存してゐたかを物語るものであるに外ならなかつたのである。

都市の成立はそれ故に決して單なる自然發生的のものではあり得ない。それは個人が集合して家族となり家族が擴大して氏族となり、氏族の團結によつて都市となるのではない。これらの擴大と增殖とが如何に大なる範圍に及ぶにせよ決してポリスを形作らない、それは都市(urbs)を形成するかもしらぬが都市國家(polis)を形造しはしない。これを反面からいへば都市國家は假令土地に於て狹く住民に於て少數であつても尙一つの都市國家であり得るのである。否プラトンもアリストテレスも都市國家の條件として見渡し得るだけの土地と數へ得るだけの市民をもつことを理想としたことは有名である。ツキユディデスはポリスといふ語を多くの場合村落と都市國家との中間にあるものを意味するやうに用ゐてゐたといはれる(Fowler: op. cit. p. 49)がそれはむしろこの兩者をふくむが故にそれらをそこに明別すべきことを敎ふるものでなければならぬ。ポリスとは都市であるがしかし單なる自然的都市ではなく、同時に都市國家であるべきであつた。しかしポリスを單なる都市から都市國家にまで移らしむるところのものは何であるか。

三

この問題に答へるために、或はその前に都市の成立について尙一つの考察を重ねて置かう。それは都市を構成する要素はもとより人間であり市民であるが、それは決して單なる個人ではなく、却つて家族であり、氏族でありゲノスまたはゲンス（gens）と名づけらるるものであるといふことである。都市の單位は一人の人間でなく、既に一個の協同體であつた。このことは「二」にのべた都市が個人から家族に、家族から氏族に乃至は種族に擴大することによつて成立するものでないことと關聯して第二に注意すべき事項であるといはねばならぬ。自然の順序からいつても個人があつて家族があるのではなく、却つて個人は家族の中に生れるのである。少くとも個人は家族または部族の中に生れることによつて初めて一個の人間としての存在が認められるのである。人間は二たび生れるものであるといはれる、――一度は母の胎内から、二たびは社會の一員として元服することによつて。ディオニュソスの讃歌ディティラムブス（Dithyrambus）は二つの戸（δυας-θυραι）をもつものの生の讃歌であつたと解せられる。人間の社會的單位は個人でなくして家族であり就中ゲノス又はゲンスである。ではゲンスまたはゲネーとよばるゝものは如何なる構造を有するものであるか。ポエニ戰爭の時代のローマ史をよむ人は Claudius Pulcher, Claudius Nero, Claudius Centho 等の名に出あふであらう、さうしてこれらは所謂 Claudius 家の人々であることを知るであらう。これらの人々は第一に血緣によつてつながれてゐる。クラウディウスとはクラウヅスの子孫であり、ブタダイ（Butadae）とはブーテス（Butes）の一族であることを示してゐる。これらは單に名の類似にすぎぬとも考へられるがしかしそれがさうでな

いことはコルネリアの一族に Scipios や Lentuli や Cossi や Sylhao 等の人々がゐたことによつても知らるゝのである。ローマ人は多くの場合三つの名を、例へば Publius Cornelius Scipio の如くもつてゐた。しかしこれらの中孰れが眞の名であらうか。Publius は單に前に置かれた praenomen にすぎない、Scipio もたゞ附け加へられた名即ち agnomen であるにすぎぬ。眞の名は Cornelius であるが、却つてそれはその人の名でなくゲンス全體の名稱であつた。このことはギリシアに於ても同樣であつた。例へば Μιλτιάδης Κίμωνος Λαπιάδης に於てラキアデースはゲノスの名であり、日常生活に於てはプロノーメンだけが呼ばれるが政治上また宗教上の公式の場合には必ず全名をまたはゲノスの名が示されねばならなかつた。ピンダロスはゲノスの名を揭げることなしには英雄を決して讃美しなかつたといはれる。これらの事柄を見ても個人の名が如何に氏族のそれに依存するかゞわかるのみでなく、個人の存在が如何に氏族の中に包含せられてゐるかも知られ得るであらう。スキピオといふ個人の前に既にコルネリウス家があつたのであり、スキピオの家族が他の家族と合併してコルネリウス家が出來上つたのではないのである（Courlauges: p. 142）。クラウディス家は永く單一なる家族に止り Sabinus または Regillensis といふプロノーメンをもつてゐた。それが三つの支家に分れたのは第一ポエニ戰爭の頃に於てゞあつたと傳へられる。その中 Puleburi は二世紀程つづき Centhos 家は直ちに絶へ、ひとり Nero 家が皇帝の時代まで打ちつゞいたといふことである。

これらの事實からして我々はゲンスが單に家族の聯合ではなくむしろ家族そのものであり、それが單一の直系であつても多くの分家に分れてゐても依然として一つの家族であることが知られるのである。さうしてポリスを構成する單位はこのゲノスであつて決して單なる個人ではなかつた。個人はいはゞこのゲノスの中に埋沒せられてそれを通

してのみ國家の單位であり得たのである。クーランジは都市の成立をこのゲノスに於てよりもむしろフラトリア(Phratria, curia)からして初めようとしてゐるやうであるが、しかしその何故であるかを彼から學ぶことができない。彼はフラトリアを多くの家族のまたはゲノスの結合からして生じたものと見てゐるやうであるが(第三章一節)さうならば分量の相違にすぎぬこととならう。フラトリアに血緣の基礎があるかと問ふて彼はたゞ之を否定するに止めてゐるがむしろこの點に我々の注意が向けらるべきであると思ふ。フラトリアにはゲノスに於けるが如く必しも血のつながりを必要としない。それはむしろ貴族とその使用人とからなる一つの政治的集團である。ホメロスではフラトリアとプイレーは軍隊の區別にすぎなかつた。トロイの戰の爲に集つた全ギリシア人はフラトリアと種族とに從つて區分せられたことは有名である。ゲノスが Demos に變へられ、氏族が政治的區分によつて規定せられるやうに、擴大せるゲノスが一つの政治的原理によつて把握せられたときフラトリアが生ずると見ることが妥當でないかと思ふ。この意味に於てポリスがフラトリアを單位とすることも理由のあることである。しかし今の問題はこのことにあるのではなく、ポリスの單位が個人にではなく却つて一つの集團――それがゲノスであるにせよフラトリアであるにせよ、――にあるといふことが當面の關心事でなければならぬ。

古代社會に於て個人が單位でなくたゞその要素にすぎなかつたことは往々にしてそこでは個人の存在が全く沒却せられ、個人は何の自由をももつてゐなかつたことと同一視せられ易い。そして古代は恰も全體主義の樂園であるかの如く考へられ、そこには現代とは全く別種の生活と思考樣式とが支配してゐたが如く論ぜらるゝのが普通である。クーランジの研究もこのやうな立場に立つてゐるやうである。しかし今日に到るまで依然として數千年以前の未開時代

に止つてゐる蠻族に於てさへそのことの必しも眞でないことが近時の研究者、例へばマリノウスキー一派の人々によつて明かにせられた。況やギリシアやローマの如く殆どこの意味の原初時代をもつてゐなかつた人民に於て、または後來高度の文化を發展すべき素質に惠まれた民族にあつては尙さらにこのことが眞でないといはねばならぬ。ポリスの單位がゲノスまたはフラトリアであつて個人でなかつたといふのは、決してそれ故にポリスに於ては個人の存在が認められずその自由性が剝奪せられてゐたことを主張するものではない。この二つは別のことであつて我々はたゞ都市國家を構成する直接なる單位がゲノス又はフラトリアであつて個人ではなかつたと言はうとするのみである。前にも引用したやうにプルタルクスによればテセウスがアテナイの建國にあたつて人民に約したのは獨裁なき君權なき共和國であり、彼はたゞ戰時に於ける國軍の總司令と平時に於ける法權の擁護者たることに甘んぜんとしたのである。ギリシアの政治形態が常にデモクラシーへ方向をとつて進展したことは周知の事實であり、テイラニスの政治が意外に共和的であつたことはむしろ人々の驚くところである。アリストテレスのいふごとく民衆政治を好み自ら主權を抛つた人はテセウスを以て嚆矢とする、ホメロスの船舶名簿(Catalogue of ships)の中にも、アテナイ人たゞ Demos といふ名を與へてゐるのはこの點を裏書してゐるやうである。ギリシアの歷史はむしろかくの如き社會に於て個性が如何に進展してきたかを事實に於て示すものであり、我々の仕事も個人意識が如何にしてそこに開發せられたかを討究するところにあるといはねばならない。

しかしそれと同時にポリスの成立が一つの集團的なるものに初まり、そこに於ては個人はそれに屬するものとしてのみ意味をもつてゐたことも事實であらう。ローマに於て兵役の義務は五十歲に、アテナイでは六十歲に、スパルタ

では終生に及んだ、人民の財産は國家の管理の下に置かれ、必要の場合には婦人は裝身の寶玉類をも提供しなければならなかつた。アテナイの法律は宗教の名に於て獨身を禁し、スパルタでは晩婚をさへ罰した。ロクリでは酒は必ず水を割つてのむべきことに定められ、ミレトスでは女の飲酒が嚴禁せられた。衣服も各都市によつて多くは一定せられスパルタでは女の結髮にさへ干渉したといはれる。ロードスでは男子の髯を剃ることが禁ぜられた。スパルタ軍がレウクトラの戰ひに敗れ多くの將士がそこに戰死したことが報ぜられたとき、スパルタ人は之を快活なる顏つきで受けとることに慣らされてゐた。戰場から歸還した息子を見た母親は却つて泣き、戰死して再び歸らざる息子の母は喜ばしげに見え、神に感謝すべく神殿に走つたと傳へられてゐる。アテナイでは政爭のあるとき中立の態度をとることは許されなかつた。國家に對して冷淡なるものは公民心の缺乏者乃至は喪失者として罰せられたといふ。

故國(Patria)はそこに人々が喜んで住み、それに對して思慕の情をたゝへる場所であるのみでなく、人民にとつてより高く殆ど神々しき或ものでさへあつた。人々が敵と戰ふのも故國のためであり、戰つていさぎよしとするのも自己に對してであるよりもパトリアのためであるに外ならなかつた。ミルチアデスやテミストクレスがマラトン又はサラミスに戰つたのも彼等の名に於てよりもむしろアテナイの名に於てゞあつた。デモステネスは人々が、テイモテオスがケルキラを占領したとかカブリアスがナクソスに於て敵を敗つたとかいふのを聞いてむしろ墮落だと嘆いたといふ。セリフオスの或人がテミストクレスに語つて、「あなたは自分自身によつてゞなく、アテナイによつて有名になられた」と語つたときテミストクレスは次の如く答へたといふ、「とにかくあなたがアテナイ人として有名になつたのではないやうに私もセリフオス人として有名になつたのではない」と。ブルックハルトも云つたやうに、ギリシア

のポリスは初めから全體的なる或ものに出發する、さうしてそれは部分――個々の家や個々の人間よりも先きに存在するのである。勿論アリストテレスのアテナイ人の國家に書かれてゐるやうに「アテナイの部族は四つに分たれる、恰も一年の内の四季を眞似る如くに。その部族の各々が三つの部分に分たれかくてすべて十二の部分が生じた。丁度各年の月が(十二)ある如く。この三部分がトリツチユエス或は氏族團と呼ばれた。この氏族團の内に三十の氏が分たれる。一月の間の日(數)の如く氏は三十人より成る」(斷片三八五)。さうして氏族といひ部族といふのも幾人かの個人から成立つてゐることはいふまでもないであらう。しかしそれにも拘らずポリスを構成するものは氏族または部族であつて個人ではない。個人はたゞこの氏族に屬するものとして意味をもち、それがポリスの要素をなすのはこの全體性を通してであることに注意せられねばならぬ。このとき一般的なるものは個物にすぐれてそこにあるのみでなく、それは個々のものを、瞬時的なるものを、移りゆくものを越えてそこに永續するのである。そして個物はたゞこの如きものとしてあるのでなく同時に一般的なるものに於てあり、そこに投げ入れられそれに支へられそれに要求せられたものとして存在する。個人の存在もまたこの如く凡てはこの一般者に負ふてゐるのである。それがそこに單に有るのみでなく、同時に善くあることも幸ひに有ることも凡てはこの一般者に負ふてゐる。ポリスとはこの意味に於て一つのより高き存在であり、それがそこに生じたのもそれによつて人間の生活が單に可能であるばかりでなく、正しく貴くすぐれたる意味に於てそれが實際に營まれんがためであつた。さうして茲に初めて政治するものと政治せらるゝものとの關係が生ずるのである。一般者は政治するものであり個物はせらるゝものであり、そしてこの關係なしにはポリスは成立しないのである。卽ちポリスとは單に個人の集團でなく、一般的なるものと個人的なるものとの――

支配者と被支配者との結合であつた。

四

かくの如き支配者についてアリストテレスは四つを數へた。一は英雄時代の王政である。そこでは統治が有意的なる人々の上に行はれるがその任務は限られてゐる、王は將帥であり裁判官であり宗教の統制者である。二はペルシア人のそれであり、それは法律をもつてゐるが世襲的な專制政治である。三は所謂 Aesymnete であり、選擧せられたるテイラニスである。第四はラケダイモニアのそれであり主として世襲的な將帥としてゞある(Pol. III. 14 1285 b)。支配的關係が如何にし起りそれが何を意味するかを知るために第一の英雄時代を瞥見しよう。ホメロス的國家の頂上に立つものはバシレウス (Basileus) であり、それにつゞくものはやゝ劣つてはゐるがやはり同じ名でよばれる元老であり、次は多くの自由民からなる議會である。王は多くはヅエウスから生れた、ヅエウスによつて養はれたといはれその祖先に神をもつことが普通である。人民が王に服從するのも第一にこの系譜の故であつた。アガメムノンの王笏は神によつて作られたと傳へられてゐる。ホメロスの社會では王のなすべき仕事は多端であつた。彼は賓客の接待に氣つかはねばならず、交誼を求めて他の都市を訪問すべき義務をもつてゐた。戰時には將軍となり絶對の統帥權をもつことは勿論であらう。トロイの戰に集つた諸將はそれぞれ一國の王であるが、凡てアガメムノンの指揮に服從せねばならなかつた。王の下に元老(Gerontes)からなる會合がありさらに一般人民からなる議會があつた。これらを召集するのは王の權限に屬するが會議は必しも形式的に開かれず、大事の起るとき人民は自らアゴラーに集ること

を常とした。アゴラー（Agora）は都市の中心であり、小都市に於てはむしろ都市そのものと同一でさへあつた。それは市場と譯せらるゝには不十分であらう、むしろアゴラーは ἀγείρειν の意をもち人々の集り談り、相逢ふところであり、時として一定の場所を定めないことすらあつたのである。それはまた定着した都市に於てのみでなく、例へばイリオンの前にあるアカイア人の陣營にさへ設けられ、そこには神々が祭られてゐたと傳へられる（Illiad. XI 807）。海よりの都市に於ては波止場に近くアゴラーがありそこには多くの船舶をひかへて神殿があり、官廳があり記念碑があり交易場があつた。外國人がギリシアの風習に慣れんとするにはアゴラーに來往するのが一番の近道であつたことは、スキタイの王スキウレスがポリウステネスの都に來たときその衣を脱いでギリシア風に着かへ微行でアゴラーに屢々出入したと傳へられる（Herodotus IV. 78）ことによつても明かであらう。アゴラーはギリシアの都市に特有なものであり、他國に發達しなかつたことは例へばキユロス王がスパルタの使者に向つて「儂は寄り集つて互に誓ひを立てながら欺し合ふ一定の場所を市の眞中に有つてゐるといふやうな、そんな若達を未だ曾て怖れたことはないのだ」と云つたことによつても知られるであらう。キユロスは何れのギリシア人も市場を設けて賣買を行つてゐるといふので、ギリシア全體を指して斯樣な激しい言葉を浴せたのである。つまり波斯人自らは市場を利用する習慣を有つてゐないし、大體彼等はアゴラーそのものを有つてゐないのであるとヘロドトスも傳へてゐる（Herodotus I. 153）。そこにまたキユロスはアゴラーの存在をギリシア人の惡德の發生地と見做したとも考へられる。プラトンがテアイテトス（二四）に於て求智者中の求智者ともいはるべき人は若い時からして先づアゴラーへ行くにはどの道を行くかといふことを知らないものであるといつたのもこの消息を語るものであらう。アゴラーは屢〻俗業の市場（ὀγυιὰ

ἀγορᾶς) に墮した。しかしそれが善きにせよ悪きにせよ、かくの如きものがギリシアの都市生活の中心をなしてゐたことは事實であり、それを無視して彼等の文化も思惟形式も論じ得られぬことは Agora からして kata-agoreuo 卽 kategorie といふ語が生成したことによつても證明し得られるであらう。

形式的なるまたは公の會合も必しも一定の時處に開かれたのではない、テレマコスが議會を召集したときアイギュプティオスは、二十年前高貴なるオディセウスがうつろなる船にて首途せる以來かつて集ひもなく會議もなかりしことを陳述してゐる(Od. II. 26)。これは勿論特別の場合であるが集合は必要ある場合隨時に開かれるのを通例としたやうである。アガメムノンはトロイへの遠征に先立ち人民の精神力を試さんがために召集を命じたことがある、このときアカイア人は熱心と迅速とを以て之に應じた(Il. II 95)。會合は人民の意思を問ふよりもむしろ命令を傳へ、ニウスを聞かしめんが爲であつたことが多い。これを傳へる人は必しも長官に限らずテルシテス(Thersites)の如く一兵卒であつたこともあるのである。このとき人々は何故にテルシテスがその役に當つたかを問はなかつた、問ふべきは彼にあらずして彼の言つたことに對してゞあつたからしてゞある。人民に議論を許さずたゞ命令を傳へニウスをきかしめるだけの會合を βουλή から區別して特に θεῖος と名づけられたといふ說がある。しかしトーコスとは座席を意味するところからして果して特にかゝる任務をもつてゐたか否かは明かでないやうである。たゞ議論し批評する會合は比較的後代に發達したことだけは確かであるであらう。英雄時代には未だ成文の法律がなかつた。法律の原初的なるものとしてフランコットなどは φήμισμα をあげ、それは法律であるよりも布告であり décrets, ordonnances, arrêtés であることを主張してゐる(H. Francotte: Mélanges de droit public grec. p. 4)。ノモスが原理的であり

法律的であるに對してプセフイスマは實用的であり、それぞれの場合に實施せらるべき命令であるといはれる。しかしプセフィスマは語源的には ψῆφος（小石）から來たものであり、それは何らかの仕方によつて投票せられたものであり、何處かに於て表示せられたる人民の意志をあらはすものでなければならない。法律の原初的なるものはむしろ θέμιστες であつたであらう。それはもともとテミスの神によつて許され嘉納せられ、神の權威によつて命ぜられたものであつた。それは或るとき或場合に正しく適當なる（θέμις）ものを權威ある仕方に於て布告せられたものである。王は笏をもつて居りそれは神につらなつてゐた。しかしホメロス時代にはそれが神から出たものであることが漸く忘られ、王は神官であることをやめて單に裁判官となつてゐたのである。δίκη が θέμις から發生したのもこの理由によるのであらう。グロッツはこの二つの關係を次の如く言表してゐる、テミステスは神來の自發的なる裁斷であり、ディケーは慣習に基く裁判である。前者は超自然的、神祕的であり、後者は家族間の關係をあらはす習慣に基いてゐる(Glotz; La solidalité de la famille dans le droit criminel en Grèce. 21)。

ホメロスの時代には公の裁判と私的なる會合との區別が明瞭に立てられなかつた。例へばオデウセイアに於てテレマコスが例の求婚者に對して裁斷をなさうとした場合を考へよ。テレマコスはこれを私人的なる家庭爭議と見ようとしたがハリテルセスは國家の重大事とし、全人民に關する會合であると解釋した。テレマコスはこれらの求婚者を罰することも報償を求めることもしなかつた。たゞ彼等を家庭から追放せんことを求めたのみである。

ἴστωρ といふのは普通に裁判所に於ける證人と解せられてゐる。history はこの語に近いがそれはエクスパートの意であり、或ことについてよく知れる人である。或人は之を裁判官の意に解してゐる（Darreste: Nouvelle études

d'histoire du droit 1902. p. 11)。イドメネウスとアヤックスとの爭ひに於てアガメムノンは仲裁者(ἴστωρ)として立つてゐる。ホメロス時代には證人と仲裁者との區別が明確でなかつたことに因するのであらう。さうしてこれらを兼備したものが神々であつた。その名に於て誓ひが誓はれるところの神々は μάρτυροι 又は επιμάρτυροι と名づけられた。彼等は證人であるのみでなく誓約の保證者であり、または裁判者でもあつたのである。しかし μάρτυρος といふ語は時として或事柄に通曉した人を、またはそれに親しい人を意味した。要するにホメロスでは裁判の當事者と第三者との區別が未だ明晰ではなかつたといふべきであらう。

ホメロスに比してヘシオドスの時代に於てはこれらの區別が漸次明かとなり、種々なる立法の形式もやゝ整ふに到つた。ヘシオドスの語として「汝の兄弟について取扱ふときでさへも證人を呼べ、但し微笑を以て」(Erga. 371)といふのがある。ヘシオドスはこの教訓を彼自らの兄弟から學んだ。傳によれば彼はその兄弟と遺産について爭はねばならなかつた苦い經驗の持主であつたから。しかしこの場合でも彼が微笑をもつてといつて居るのは我々にも微笑を誘ふ心遣ひである。しかもこの證人が賄賂のために法を曲ぐるに及んでヘシオドスの怒は正義に對する强烈な要求となつてあらはれざるを得なかつた。アゴラーに於いて裁判をなす人は賄賂をむさぼる王(δωροφάγοι βασιλῆες)であり、曲れる裁斷(σκολιῆσι δίκῃσι)によつて人々を壓迫する輩に外ならないと彼は痛罵した(Erga 220)。ヘシオドスの時代に法律行政がホメロスに比して大に進歩したといふのが通說であるが、しかし法の强制力といふ點に於て如何程の發展をなしとげたかは疑問であらう。ヘシオドス時代の法も尙依然として傳說と慣習と先例とによつてゐたにすぎない。ボエオチアの農夫には未だ强制力ある正當なる法が知られなかつたと見るべきであらう。それが國家的

なる力をもつて人民を拘束するやうになり得たのはさらに後代に屬するといはねばならない。しかしヘシオドスの時代から法は漸くにして成文法化せらるべき氣運に促された。通説によつても成文法の起源が一方にヘシオドスによつて代表せられる農民と、アルカエウス(Alcaeus)と、テオグニス(Theozuis)とによつて代表された貴族とに歸せられてゐる。しかもこの成文化がギリシアの本土に於てよりもむしろ殖民地に於てより早くなしとげられたことは注意に價するであらう。何となれば哲學思想がさうであつたやうに殖民地に於ては慣習や前例に束縛せられることなく自由なる改革が行はれ得たであらうからである。のみならず殖民地に於ては法令は初めから强制的であり執行的であることを必要とした、なぜならそこでは住民は諸方から來集した人々によつてなり、樣々なる風習や思考によつて分たれてゐたからして、之を統一するにはむしろ絶對的なる强制を必要としたからである。次にこのことは殊に西方の殖民地に於て先づ初められた。そこはイオニア人、ドーリア人、アカイア人等の種々なる人種によつて殖民せられてゐた。アカイア人のロクリスにはゾアレウコス(Zaloueus)が、イオニア人のカタナにはカロンダス(Charondas)が、ドーリアのシラクサにはデイオクレス(Diocles)がそれぞれ主權者としてあつた。前二者の法律はギリシアに於ける最古の成文法であつたといはれる。殊にカロンダスの法を奉するものとしては Naxos, Zancle, Mylae, Himera (以上は Scilia 市) Rhegium, Cyme (これは伊太利) 等の諸都市があつた。ツーリイの如き混合した人種の殖民地にもカロンダスの法が行はれたといはれる。のみならずこの法はコスの島やカパドキアの一市 Mazaka にも及んだ。小亞細亞の諸殖民地もそれぞれその立法者をもつてゐる。ミティレーネのピッタコスやケオスのアリスティデス等が知られてゐる。本土に於てスパルタのリコルゴスやアテナイのドラコンなどは餘りにも有名であらう。コリント人のピイ

ロラウスは却つてテーバイの爲に法を編んだ、そしてコリント人自らは Pheidon によつて法を與へられたと傳へられてゐる。

立法者は社會の種々たる階級に見出されるのであるが殊に中產階級から出た人が多く、アリストラレスもそれを以て最善とした（Pol. IV. 12. 1296 a）。貴族は却つて自己の既得權を失ふ恐れがあるところからして成文法には反對であつた。傳說によればゾアレウコスの法は彼が貧しき羊飼ひであつたときアテナの神からして夢に托して與へられたものであつたといふ。ピツタコスは彼自らは貴族ではないが、タイラントのペンテイルスの女を娶ることによつて貴族となつた人である。彼は法の選定のために十年間都市の最高主權者（αἰσυμνήτης）として選はれた。アテナイに於てもドラコンは六二一年テスモテーテとして選ばれ、ソロンも διαλλακτής としてアルコンに選ばれた。

初期の法律はいふまでもなく古き傳說と習俗とによるところが多かつたから立法者はその國の風俗習慣を知悉するのみでなく、他國の制度をできるだけ調査する必要があつた。ゾアレウコスは其の法律をスパルタ及びアテナイから學んだといはれ、プルタルコスによればリコルゴスもクレタ、エヂプトを初め恐らくはリビア、イベリア、インディアの法律をも研究したといはれる（Plut. Lycurgus IV）。しかしそれと同時に苟くもそれが新しき立法である以上は從來の成定法とは何らか異つたものを含んでゐなければならない。政治的または社會的なる新しき情勢によつて法を新しくする必要に迫られたこともあつたであらう。カロンダスはかくして多くの新しい法規を作つた。しかしまた法律を改變することは容易ならぬ業である。それは第一に神に源して居り神によつて絕えず見守られてさへも居るからである。ゾエウスはクレタの法律の責任者として有名である。ロクリスでは法律を變革せんとする人は首に綱

をかけて一千人の議員の前でその理由を開陳しなければならなかつた、さうして若し議會が不幸にして彼に反對すれば立ちどころに首を縊らねばならなかつたと傳へられてゐる。二百年の長き年月をへて變へられたのはたゞ一つの法律でしかなかつたとそこでは傳へられてゐる。法律が古く不變であることはそれがすぐれて正しきものであることの證據として屢々語られた（Antiphon V. 14）。アリストテレスは法律が長い間變化なしに止ることには反對であるが新しき法律を設定しても大した利益のない場合にはむしろ古いまゝに殘し置くべきであると考へた、朝令暮改は人々をして法に對する輕侮の念を養ひ、その結果は遵法の精神を失はしめるに到るからである（Pol. II. 8. 1269 a）。

法が制定せられるや刑罰はもはや主權者の意志に放任せられ得ぬこととなつた。一般にこの時代の刑罰は甚しく嚴格であつたといはれる。ドラコンの法令が墨によつてではなく、血をもつて書かれたといはれるのも此意味であらう。カロンダスの法令もそれに劣らず峻嚴であつたことは、刀を帶びて議會に出入する人は死刑に處せらるといふ條項のあるのを見てもわかるであらう。さうしてカロンダスは自らこの法律を破つたため自殺したと傳へられてゐる。シラクサのデイオクレスについても同樣な話があるところを見ると彼の法令もかなりに辛いものであつたであらう。ヅアレウコスの法令によれば姦通者は目を刳つて盲にせらるべきであつたといふ。しかしカロンダスの法律にも例へば次の如きものもあつた、脫走者は女の衣をまとつて三日間アゴラーに立たざるべからず、追從者は御柳（タマリスク）を冠として公會の席上に現はれざるべからずなど。

ギリシアに於ては未だ民法とか刑法とか其の他の區別はなかつた。デモステネスは法律を二種に分つて、我々が互に交渉するものと我々と國家との關係を規定するものとの二つとしたといはれるがそれが何を意味するかは明かでな

い。アリストテレスによればミレトスのヒッポダマスは法律を三つとし、毆打と侵害と殺人とに分つたといふ(Pol. 1267 b)がもとより學問的根據のあるものではない。不思議なことには殺人に關する法律が多く傳へられず、Cumaeに於けるそれがアリストテレスによつて殘されてゐるのみである(Pol. 1269 a)、ところがイタリにあるキユマエはカルキディア人の市でありアリストテレスによれば凡てカルキディアの都市はカロンダスの法律を採用してゐたといふことであるから自殺に關する法律はカロンダスの中にあつたことになる。しかし一般にそれが取扱はるゝことの少かつたのは殺人が私人的のことであつて國家の干涉すべき事柄ではないと考へられたためであつたかもしれない。それが法律の中でも重なる一つとなつたのはドラコンの法令に於てゞあつた。

我々が以上に於いてギリシア初期の行政機構について必要以上に多くをのべたのはそれによつて都市がやがて一つの國家として成立すべき要因を明かにせんがためであつた。ポリスとは都市國家である、それは單なる都市ではなく同時に國家として存在するものでなければならぬ。それは單なる個人の集團ではなく一般的なるものと個別的なるものとの關係に於て成立するものでなければならぬ。國家に於て一般的なるものは法であり都市は法治的であることによつて國家となり得るからである。クーランジは都市の成立を專ら宗教に求めるが法の根源は神々にあるにせよ都市を國家たらしむるものが法であるといふことは認められてよいであらう。國家とはたゞ人と人との關係ではなく一般者と個人との、政治するものとせらるるものとの關係であるべきであるからである。都市國家の單位が個人にではなく一般者にあるといつたのもこの意味であつた。ポリスは個人から家族に、家族から氏族に單に分量を增大することによつては成立し得ぬといはれたのも此の意味に於てゞあつた。法とは個人の集團を國家的統一たらしむるところの

ものである。恰も自然の事物が一定の法則によつて物體をなすやうに人間は法によつて國體を形成し得るのである。人間の生活がたゞ生きることにではなく、善く生きることにあるやうに、都市の生活もたゞ人々の集るところにではなく、善く集團するところに見出されねばならない。さうして人間がよく集團することは勿論經濟的なる厚生に、または宗教的なる統一によるのでもあるが就中よき法によつて可能なのである。法とは人々を團結せしめそれに於て人を生存せしむるところのものであるに外ならぬからである。

都市國家を成立せしむるものは單に自然的なる人間でなく法によつて集團せしめられた市民または國民でなければならぬ。ポリスの性格を明かにするものは市民の資格であるが市民とは何であるか。アリストテレスは「政治學」の第三卷一章——五章に於て次の如く論じてゐる。市民とは誰れであるかといふ問題は種々に答へ得られるであらう。民主政治に於ける市民は必しも寡頭政治に於ての市民ではないであらう。しかしこれらの市民をそれに於て存在せしむるものから、または偶然的な仕方に於て市民の名を得せしめたものから離れて單的にそれが何であるかを問ふならば我々は先づ第一に市民とは或處に住んでゐるから市民となるのではないと答へねばならぬ。なぜなら異邦人も奴隷もその都市に住んでゐて差支へないからである。また市民とは出訴し、告訴せられることの外に何の權利をも持たぬものであるとはいへない、なぜならこれらのことは契約によつて所有し得るものであるからである。我々の定義せんとする市民は嚴密なる意味に於てのそれであり、それに對しては如何なる例外も許されぬものであり、その特性は何らかの公務に携はり公職についてゐるといふことに見出されるものである。但しこの公務が何であるかは限定し得ない、むしろ不定なる職務といつた方がよいであらう。たゞ國家の合議的法律的行政機構にあづかつてゐる人々をそ

の都市の市民とよぶのである。しかし實際に於ては市民とはこの兩親が市民でありまたはあつた人々の子孫である。レオンティニのゴルギアスは彼自らも苦んでゐたところから半ば皮肉に、「セメントはセメント製造業者によつて造られたものであり、ラリッサの市民はその市を作つた人々によつて作られたものである」といつた。しかしこのことも例へばクレステネスの場合の如く革命の後に市民を作つた人にとつては不都合である。彼は多くの外國人や奴隷をも市民名簿の中に記入したからである。この場合それが誰れであるかがではなく、その人が市民であるべきか否かが問題であり、さうしてさうであるべきでない人は卽ち正しからぬ人であつたのである。

それでは善き市民は善き人と同一であるか否か。それを問ふ前に我々は先づ市民の一般的なる德を考察しなければならぬであらう。水夫がさうである如く市民は市の一員であり、水夫が種々なる職務をもち、――或は能手であり或は水先案内であり或は看守人である如く市民も亦種々なる任務をもつてゐる。しかしこれらの相違に拘らず航海が水夫の共同目的であるやうに市民に共通なることは協同體のよりよき運用といふことにある。市民の道德はこの協同體の構造に關聯したものでなければならぬ。よき市民の德はそれ故に必しもよき人の德と同一であるとはいへない。

このことは支配者の德が必しも市民のそれと一致しないことによつても知られるのである、それがヤーソン(Jason)をして「私はティラニスでなかつたときは飢を感じた」といはしめたところのものであつただらう。彼は私人的生活を送ることには堪へ得なかつたのである。しかしそれと同時に人は支配することと同時に支配せらるゝことを知るのを賢しとする。否むしろ從ふことを知らぬ人は善き支配者となり得ぬといふことも眞であるであらう。この兩者を知る人にして初めてよき市民たることが出來る。善き人の德は支配することでありよき市民の德は支配すると共によく

順ふことにあると考へ、この點からして二者を區別することは誤りであるとはいへない。支配する人とさるる人との學ぶべきことは必しも同一であり得ないが、少くとも支配することと共によく順ふことを知る人にして初めてよき市民となることができるのである。のみならず支配者は支配することを順ふことによつて學ぶ、騎兵の任務は騎馬將軍の命に從ふことによつて、また歩兵のなすべきことは歩兵將軍の命令に從順なることによつてのみ學び知られるやうに。支配することを知つて順ふことを知らぬものは惡しき意味のティラニスであり、順ふことを知つて支配することを知らぬものは文字通りに奴隷である。自由人はこの二つの間にありこの二つに共にあづからねばならない。この二者は同一の事柄ではないが、よき市民は兩者を共に知つてゐなければならない。一方のみを知る人はよき人であつてもよき市民ではあり得ない。よき市民はこの兩者に通達するところに見出され、よき市民を作るものはこの一つをではなく兩者を知るところにあるのである。勿論人々は性情とテンペラメントによつて或はより支配的に、或はより被支配的に生みつけられてゐるでもあらう。しかしそれは或人が男性であり或人が女性的であるのと同じく支配的なる人は支配し被支配的なる人々は從順であればよい。たゞよき市民は必ずこの兩者を具備してゐなければならない。笛を造る人と笛を吹く人とはそれぞれ異りたる天分によるのであるが音樂の世界はこの二者によつて初めて完きを得るやうに、ポリスの世界もたゞ之を支配する人によつてのみでなく之に順ふ人々によつて初めて完成せられ得るのである。——

以上は市民に關するアリストテレスの考察である。さうしてポリスの成立にとつてこれほど明確なる把握を我々は他に見出すことができぬであらう。人間が市民となるのはポリスに於てであるが、人間に於てそれが成立するのは決

して地理的なる場所に於てゞもなく、血緣的なる系譜によつてゞなく、たゞ市民の德によつてゞあることがそこに明かに語られてゐる。都市は人間の集團であるが都市國家は市民の德によつてのみ可能なのである。さうしてこの德の形式化せられたものが卽ち法である。法によつて支配し支配せられるところに都市國家が初めて成立し得るのであるといはれなければならない。（未完）